

---

# 冬のオペラ (FA/RE/g)

omotenac

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬のオペラ（FA／RE／g）

### 【Nコード】

N9737M

### 【作者名】

o m o t e n a c

### 【あらすじ】

エド女体化／中世風パラレル

間に合うか。

焦る胸中は行動に現れ、アルフォンスは駆け足の馬をさらに急がせるべく馬の腹を再び蹴った。

普段は滅多に急かすことのない乗り手の態度に馬も戸惑いを覚えていたようだが、それでも早駆けさせた甲斐はあって墓地の丘はもう目前だ。

見知らぬ人がいるという知らせを聞くなり馬に飛び乗って来たが、使いが城に来るまでの過程を考えればその見知らぬ人に会える可能性は薄かった。領主の墓地で見慣れぬ男の姿が目撃されてからもう小一時間は経つのだから。

いくら晴れているとはいえ季節は真冬。一晩かけて降った雪のおかげで空気は痛いほどに冷たい。

室内着のまま厩舎に飛び込んできたアルフォンスを見て、驚いた馬番が貸してくれた厚手のオーバーと手袋のお陰で体の防寒は完璧だが、これだけはむきだしになる頬を撫でる風の冷たさは痛いほどで、こんな寒い時に戸外の墓地にそう長い時間客人在るとは思えなかった。

しかし、緩やかな坂が始まる丘の入り口に近づけば、大昔に扉が外されて形ばかり残る石の門柱に、先ほど息せき切った使いが語った通りの黒馬が繋がれているではないか。

まだ息も荒い愛馬を宥めて穏やかに歩みよらせると、黒馬はゆっくりと面をあげてアルフォンスを見上げた。

「はじめまして」

馬は人の姿形ではなく心を見て態度を決める。

初対面で臆すればなめられるから必ずまっすぐ目を見る、というのは子供が乗馬を始める最初に教えられることだ。

まつすぐ目を見て、それから穏やかな声で話しかける。

心が通じれば馬は人間を受け入れてくれるから。

「君のご主人に会いに来たんだ」

話しかけながら自分の馬を降り、その間も黒い馬からは決して眼を逸らさずに言葉を続けた。

「この子はアッシュ。僕は今から君のご主人のところに行ってくるから二人で待つてくれるかい？」

左手で葦毛の愛馬を撫で、右手は黒い馬の目前に運ぶ。

その毛並みと同じく黒曜石と例えたいほど艶やかな黒の瞳はしばしアルフォンスを見つめ、どうやら存在を受け入れてくれるらしい。ぶるりと鼻を鳴らしアルフォンスの差し出した手に自ら顔をこすりつけてきた。

「アルフォンス様！」

自分より少し遅れて供が追いついてきたのはその時だった。さすがに供もつけず行くのは悪いと馬番が騒ぐのに、それなら適当に誰か寄越せと言っておいただ。

アルフォンスが乗ったのは城の馬の中でも一番早足の葦毛で、それに追いつくには彼も相当頑張ったに違いない。

「急がせて悪かったねナッシュ」

まずは年の近い側近に。

「アッシュもありがとう」

それから似たような名前の愛馬にも労いの言葉をかけて手綱を柱に繋ぐ。

「客人に会うからここで待つてて」

「わかりました…しかしすごい馬ですね」

自分の乗ってきた馬を少し離れた木に繋ぎ、ナッシュは見慣れぬ黒馬を眺めた。

多少泥で汚れているが毛並みも馬具も非常に立派な牡馬だ。農耕馬ほどではないがしっかりと筋肉のついた太い足と逞しい背中。

「もしかしてバーンビル種かもしれないね」

「バーンビル種：まさか！」

南の領地の中でも、領主から認定された特定の牧場でしか繁殖を許されていないという馬の名前はとても有名だ。

骨太でありながら動きが機敏でよく走る。特に有名なのは持久力で、かつては鎧の騎士をのせて三昼夜走り続けたという伝説があった。

しかしその名馬を所有できるのは王族と南の領主の一族だけ。交雑を防ぐために他領地への持込は硬く禁じられている。

当然考えられるのはこの馬に乗ってきた人物が王族か南の領主の一族ということだが、鞍を見れば横腹に刻まれた紋章は南の領家のもので、馬の品種を証明していた。

「すごいな…まさか本物に会えるなんて」

もともと馬が好きな少年にとって、幻の名馬との邂逅は奇跡のような出来事だ。驚きに声が震えている。

「お前、ちよつと触らせてくれるか？」

目を輝かせて自分を見つめる少年を黒馬は認めたようだ。

自分から頭をこすりつけてくるから思わぬ好感触にナツシユは満面の笑みを浮かべる。

「ここで待ってて」

そんな少年を置いてアルフォンスは雪と泥が混じる小道を登っていった。

領主の墓地、といっても首都にある王家の墓のように立派なものではない。

斜面全体が墓地として使われる北の丘の頂上に、柵で囲った他より少し大きい墓石があるだけだ。

この墓地を作った何代か前の領主は華美を嫌う人で、重要なのは墓石の豪華さよりもそこを常に生きている者たちで手入れすることだと説いた。

その教えに従ってこの地の民は墓地を大事にするし、日常の合間に足しげく通うのだ

領主の墓も、そこだけ柵で囲んでいるとはいえ昼間は扉が開放さ

れており人の出入りは自由。

自分の家族の墓に参った民がついでに領主の墓へ参ることも許されており、質素な墓石はそんな民の手によって常に新鮮な生花を供えられていた。

真冬の今時期は生花を用意するのは難しいから、代わりに陶器で作った小さな花束が飾られている自分の先祖の墓の前には案の定、大人の男が一人で立っていた。

実際に会うのはこれが初めてだが、話だけは何度も聞かされて良く知っているあの人で間違いないだろう。

多分あのマントのフードの下には見事な黒髪があり、美貌を称えられる調った顔立ちと黒い瞳があるのだ。

剣も学問も優秀で、賢人と呼ばれる父親の後も良い統治者になるだろうと評判の南の領主の息子。

その美貌も有名で、首都に行けば社交界の女たちの視線を全て攫うといわれるほどののに、三十を目前にして未だ妻を娶らないのを不思議がられている男。

「サー・マスタング？」

声をかければ男はゆっくりと振り返る。

いい男、というのは月並みな表現だろうか。

よく話に聞く、実年齢よりは若く見える顔立ちは、だが決して弱弱しい印象を与えない。

フードの淵から零れる髪もアルフォンスを見つめる瞳も、話に聞くのとたがわなない黒曜石の黒だった。

「ようこそ。東は遠かったでしょう」

いつもは力を持って光輝くだろう黒の瞳はどこかぼんやりと焦点の定まらずにしばしアルフォンスを見つめ、ややあつて驚きに目を見開かせた。

「君は…こちらの？」

「はい。ホーエンハイムの息子でアルフォンスといいます。エドワードの、弟です」

金の髪も金の瞳も同じ家族の名を告げれば、黒髪の男は居住まいを正しアルフォンスに向かって一礼した。

「お会いできてよかったです。」

近くに住まう者が見慣れぬ方が墓地に来たと知らせをくれまして、もしかしたらあなたではないかと思ったものですから」

「失礼した。本来ならご領主に先に挨拶をすべきところを。」

思い立ってきたものだから先立って連絡もしていない」

「お気になさらず。両親はそういった手順は気にしません。お友達が来てくれたなら兄が喜ぶというくらいでしょう」

「…そうですね」

兄が喜ぶ。

その言葉をマスタングはどう受け取ったのだろうか。

なんとも言えぬ色を目に浮かべ、視線を墓石に戻した。

墓石には代々の領主とその家族の名が没年順に並ぶが、その一番下、つまり一番新しい家人の名前を見ているのだ。

墓石を刻んだ後も新しい人物の名前はエドワード。続けて彫られた年号は去年の数字だ。

アルフォンスの兄、東の領主の総領息子であるエドワードが死亡して一月が経つ。去年といっても正確に言えばたった一月前、年の暮れの出来事だったが。

生まれた時から次代の領主としての教育を受け、十三の頃から父の代理として首都で開かれる定例の議会に参加するのが常になっていた少年は、秋の議会から帰ってくると体調を崩し療養生活を送っていた。

事故が起こったのは年末だ。療養していた別荘から年越しのため城に帰ってくる途中で崖から馬車が転落し、十五歳の少年は馬と一緒に短い生涯を閉じた。

年の暮れに葬儀が行われ、もう埋葬も済まされている。

その総領息子の死と同時に、次男のアルフォンスが後継者に認定されたという知らせが首都に運ばれたのは年が明けてからだ。

王宮が一度報告を受理し、王族と領主の血縁者の登録簿を処理し、それから別の地方に話が伝わっていくにはさらに時間がかかったろう。その手間を考えれば、南の彼の来訪は不自然なくらいに早すぎた。

「失礼ですが、兄のことはどうやってお知りになられた？」

「王宮の友人から」

大人の答えは簡潔だった。

「彼もエドワードと交友があつたから急ぎで知らせてくれて、私のところには五日前に届いた」

「それでは、随分急いできてくださったんですね」

綺麗な円形を描くこの国は大まかに四分割され、中央の首都を除いた部分を東西南北の通称四大領主がそれぞれに治めている。

だから地図で見れば南と東の領地は隣あっているが、それはあくまでも地図で見た時の話だ。実際に互いの城同士を行き来するには急いでも一週間以上かかるだろう。

彼が本当に五日で来たというなら、知らせを聞くなり供もつけず早駆けしてやつと。速さと持久力が有名なバーンビル種の馬を使ったといえ無理がなかったとは思えない。

挨拶のためフードをおろした男の顔をよくみれば丹精な顔には無精ひげが張り付き、くたびれた顔色からもこの五日間がどれだけ過酷な旅路だったかを伺わせた。

「君の兄上とは王宮議会で知り合つて。良い友人だつた」

「存じております。いつも話は聞いていましたから」

今は健康になつたが、一時は歩けないほどの大病患つた父の代わりに一つ年上の兄が王宮議会に出席したのは一昨年、まだ十三の春だつた。

幸い現在は父の体調も回復し、自身も議会に参加できるようになつたが、それ以降も勉強のためにと毎回エドワードは議会に同行するようになった。

どこでも領主の総領息子はある程度の年頃になると親について議会に参加するのは当たり前前で、エドワードの場合は人より二三年早いだけの話ではあつたけれど。

議会は年に三度、毎回一ヶ月の長期に渡つて開かれる。母と一緒に東で留守を守るアルフォンスに、エドワードはこまめに手紙をくれた。

議会の内容の他にも首都でどこに行き何を見たかとかまめに様子を知らせてくれたし、帰つてきてからはあきれるほど沢山の土産を交えてさらに語り聞かせてくれた。そんな中でも、南の領主の息子、ロイ＝マスタングの話は特に頻繁だつた。

周囲が自分を子供扱いして隔離する中、最初にエドワードに声をかけ、他の大人たちと接する機会を作ってくれた人。

学問が好きなエドワードが王立図書館の稀少な文献を見れるよう手配してくれたり、議会が休みの日には観光にも付き合ってくれたという。

そんな話をするとき、エドワードはいつも楽しそうだつた。

アルフォンスに話を聞かせながら、楽しかった時間が現実であることを繰り返し確かめていたのだと今になれば思う。

「こんなことでしかお出でいただけなかったのは残念ですが、あな

たに来ていただけて兄も喜んでいるでしょう。

せっかくですから今夜は我が城にお泊りください。

家族もあなたを待っています」

「私を？」

「ええ。あなたを」

見詰め合えば黒い瞳はしばし迷った。

いくら友人とはいえ、よその領地に事前の約束もない訪問。

さらにいえば手土産さえないのに泊めてもらうのは決まりが悪い。

そんなことを考えているのだろうか。

四大領家は他国でいえば貴族と呼べる階級だ。その交際にはやはりそれなりの礼儀というものがある。

いくら本人同士が友人であつたとしても、普通ならば事前に領主へ訪問の約束をとりつける手紙を送り、悔やみの品を携えて来るのが筋だ。

少なくともオーダーズの従者と共に馬車に乗って。

あの馬を見る限り、マスタングが持ってきた荷物は本当に必要最低限。東の領主に渡す悔やみの品や公式面会用の衣装など持ってきたとは思えない。

社交に慣れた大人が基本的な準備もせずに飛び出してきたという事実は嬉しいような嬉しくないような、なんともいえない気持ちになるけれど。

「お気持ちは嬉しいが生憎、私には時間がないんだ。議会への出発が来週だから明日にはここを発たないと」

領家同士で顔をつきあわせればなにかとすることがある。

いくらマスタングが公式訪問でないといっても午餐くらいは催さなくてはいけないだろう。

しかし自分には時間がないから、と断る男へ、アルフォンスはあくまで好意的に別の手段を示した。

「もし城が面倒でしたらどうでしょう。この近くに僕の師匠の家があるのですここに一緒にしませんか？」

城のようにはいきませんが馬の手入れはきちんとできます」

急ぎの旅を駆け抜けた黒馬は随分くたびれていた。

人間以上に繊細な生き物だ。きちんとブラシをかけてやり、清潔な厩舎で好きなだけ干草を食べて休養させないと帰りの旅路がつらいだろう。

「それはありがたいが、ご迷惑では？」

「あの家は来る者拒まずです。僕もよく泊まるから城の者もわかっています。」

どちらにしても今夜の宿は必要でしょう？今夜もまた雪が降りますし、明日だつてすぐに出発できるかどうか」

大地が何ヶ月も雪に覆われる北の領地に比べれば東の降雪量など微々たるものだ。

それでも、一日二日は外の仕事も出来ないほどの大雪が三度は降らなければ春は来ない。

昔からの言い伝えどおり、十二月から二月まではば一月おきにふる大雪の、今降っているのはもう最後の雪だ。

三度目の雪が過ぎれば春は近いが、その前に冬將軍が最後の一踏ん張り、といわんばかりの大雪を降らせる。

どちらにしろ早く行き先を決めなければ誰にとっても都合が悪かった。

「下に供がいますから彼に言付けを頼めばいい。」

今日は休んで、明日の朝一緒に城に行きませんか？両親とは朝食くらい一緒に過ごしていただければ」

空は朝から曇り気味で、アルフォンスが墓地に来るまでの間もちろちら白いものが降っていたが、話している間にもそれは少しずつ勢いを増していた。

「せっかく東までおいで頂いて町の宿に泊めたりしたら我々の面目が立ちません」

だから是非、と繰り返せばさすがにそれ以上断るのは失礼と思つたのだろう。

「では遠慮なく甘えさせていただく」

世話になる、とマスタングは一礼した。

まだ成人もしていない子供に対して堅苦しいほどで、思わずアルフォンスは笑ってしまう。

馬と一緒に待っていた従者に今夜は窪地の師匠の家に泊まること、明日の午前中にロイ・マスタングを伴って城へ帰る言付けを頼み、少年が急いで城に帰るのを見送ってから自分たちも馬を出した。

「師匠の家はあの丘の向こうなんです」

日が沈む方向を指差し、それから隣に並ぶ黒馬にもアルフォンスは語りかけた。

「牧場の人たちは君を見て騒ぐかもしれないね」

東の地では絶対に見ることのできない品種だ。

決して馬に無作法はしないが、噂に聞く名馬はどんなものかとひつきりなしに厩舎へやってくる牧場主夫婦や牧童たちの姿が目には浮かぶようだった。

「牧場ということは、イズミ師匠のお宅なのか？」

しかし、そこで思いがけず客人が行き先の主の名を上げた。

「……ご存知で？」

領家の子息を指導する教育係、そして男性顔負けの武術の達人としてイズミ・カーティスの名は東部では有名だが、いくらなんでも南部までその名が知れているとは思えない。

「エドワードが土産を買う時はいつも付き合っていたんだ。

だからこちらの方々には会ったことがないが親近感がある。

君に母上に師匠に、医者ロックベル家のウィンリイ」

あげられる名前は確かに親しい人物ばかりだった。

それと同時に、首都の繁華街で土産を仲良く土産を選ぶ二人を想像すればなんとなく面白くなかった。

首都での出来事はどんな些細なことでも聞かせてくれたのに、土産を二人で選んでいたことなどエドワードはかけらも口にすることはない。

「そうやって良く話を聞くから、来たこともないのに東部には親近感があってね」

けれどマスタングがそんなアルフォンスの内情に気づく由もない。「特に君の話は良く聞いていた。」

エドワードがあんまり褒めるものだから、いったい弟君とはどんな子だろうかとよく想像したよ」

「実物はどうですか？」

自慢の弟、と公言して憚らなかったエドワードのことだから決して悪く言いはしなかったろうが。

「あまり想像と違わなかったな。」

ホーエンハイム氏にも親しくさせていただいているから弟君もこうだろうと予想した通りだった」

多分褒めてくれているのだろう。

「僕もあなたのことは兄から詳しく聞いてたんですが、想像と実際会ってみるのではやはり違いますね」

エドワードが語るロイ「マスタングは確かに有能であったが、それと同時に少し風変わりな大人だった。」

暇さえあれば王宮図書館の本を読みふけるエドワードを外に連れ出し、どこからか平民の服を手に入れてお忍びで市に行くようなこともあったという。

「いつも釣りをしたとか、馬で遠乗りしたとか、そんなことばかり手紙に書いてあるから実はあまり仕事をしない方だと思っていました」

「どうやら私は怠け者に見えるらしくてね、部下にも『無能』と呼ばれてしまう」

「ホークアイさんですか？」

南の領家では女性の文官職がいるという噂は以前から聞いていたが、その女性がマスタングの側近であるということは兄から教えてもらったことだ。

「君も私のことを良く知っているな」

「兄から聞いたことです」

「私も、エドワードから色んなことを聞いたよ」

そしていろんなことを話して聞かせた。

風にかき消されそうなほど小さな声だったが、最後の呟きもアルフオンスの耳にはしっかりと届いていた。

議会の間、いや、首都で過ごす一時期、この二人が親密に過ごしていたことが感じられて、胸に沸くモヤは嫉妬なのかもしれない。生まれた時から一緒に過ごしてきた仲の良い家族が、見知らぬ他人にばかり意識を向けるのがわかって面白くなかったのは以前からだ。土産を並べながら首都での出来事を一生懸命話すが、内容はマスタングのことばかりだ、とからかえば顔を真っ赤に染めて、次には頬を膨らませて怒った兄。

そんなアルフオンスの横で、ロイ＝マスタングもなにかしら故人との過去を思い返しているのだろう。

雪がちらつく景色を見つめる横顔には憂いがあって、牧場につくまではしばらく沈黙が続いた。

頬に触れる柔らかさに体が反応した。

はりついた瞼をこじ開ければ目前は白っぽい布で視界を塞がれている。触れるやわらかさは毛布のそれで、ようやく自分の居場所と状況を思い出した。

ここは東の領地。城下から少し離れた大牧場だ。

慌てて体を起こせば自分が寝ていたのは夕餉を食べた居間の長椅子だったが、意識を失う前に並んでいたご馳走も、供に食事をしていた牧場の人々の姿もなかった。

居間はすっかり綺麗に片付けられ、火がほのかに明るい暖炉の周辺以外は暗い。

今は夜中で、家人たちも眠ってしまったのか。

多分自分は疲れのあまり眠り込んでしまっただけで、牧場の人々はそれを起こさぬように席を片付けていったのだろう。

親切に感謝すると同時に、いくら疲れているとはいえまさか食事の席で眠ってしまうとは自分に呆れてしまう。だが、東のこの地までの旅は過酷で、体も限界に近づいていたことは否めなかった。

持久力には定評のある愛馬と共に長距離を走り続けて五日、ようやく目的の場所にたどり着くまでは睡眠も休憩も最低限で済ませてきた。

それでも旅の間は神経が高ぶっていたせいで気づかなかったが、牧場主の親切なもてなしにより風呂で体を温め、食事で空腹を満たし人心地つくくと、緊張の糸がそこでぷつりと切れてしまったのだ。

しかし短い合間にも眠りは深かったようで、体は軽い。

帰路のことを考えれば朝までじつくり眠るべきで、最初に案内された寝室に戻ろうかと体を起こした。

そもそも、ベッドを与えられているのに暖炉の前で寝るのはとても無礼なことだ。突然訪問しただけでも迷惑なのに、薪を余分に使わ

せるなど決して良いことではない。

だから布を剥いで体を起こすのと、廊下につながるドアが開くのは同時だった。

「おや、起きてたのかい」

男のような口調だが声の主は女だ。

彼女が持参のランプをかざすと暗かった居間にも光が入る。  
間違いなくこの牧場の女主人だ。

自分をここにつれてきたアルフォンスには師匠、と呼ばれている彼女の名はイズミといった。

「今起きたところです。失礼しました」

こんなところで寝てしまつて、と詫びる。

「気にしなさんな。疲れてるんだから」

そこまで言つて、なにか思い出したようにイズミは肩を揺らして笑つた。

「だけど城じゃなくてよかったね。晚餐の間でフォークを握つたまま寝たら大変だ」

意識を失つた自分の行動を教えられれば頬が熱くなる。

食事の席で眠るなど、場合によっては政治問題だ。

「まあ、領主殿はそれを怒るような人じゃないがね」

知つてるだろう？と問う彼女の肩書きを思えば、東の領主のおおらかさというのか、格式ばらないことは見てとれる。

ロイよりいくらか年上だがそれでも十分若い年代の女性は武術の達人で、領主の子供に教授する役目を請け負っている。

綴りや算術ならともかく、剣や武術を女性が教えるなどこの国では異例のことだ。

礼儀や形式を重んじる父は、変わり者のホーエンハイムがやることは相変わらず理解できないが、子息に武術を教授するほどの女といえばきつと男性より勇ましい猛者だろうと語っていた。

しかしこうやって見る限り、多少がさつな言葉遣いを除けばイズミはカーティスはごく普通の女性だった。

事前の約束もなく突然やってきた客に嫌な顔一つ見せず風呂とベッドを支度し、食事を振る舞い、料理を誉める夫の言葉に喜ぶ。転寝をした客が寒くないように気遣う。

「外に行ってたんですか？」

ランプの灯りが持ち込まれて初めて気づいたが、イズミはフード付のコートを着込んでいた。

「ちょっと馬の様子を見てきたんだよ。

一匹調子がよくないのがいてね」

時間を問えばすでに日付を越えている。

他の人々はとくに眠りについたのに、自分が居間で寝ていたせいでイズミはまだ休めないではないか。

ばつの悪い顔をするロイを見て、彼女は気にすることはないというように笑ってみせた。

「今さっき雪は止んだがまたいくらか積もったよ。明日の朝は冷えるだろうね」

「あれからまた降ったんですか？」

アルフォンスと会った時に降り始めた雪は、夕食の時刻には止んでいた。しかし、ロイが眠っている間にまた降ったのだという。

起き上がった出窓のカーテンを少しめくると、そこから見る景色は明け方を思わせる白い明るさだった。月の光を雪が照り返しているのだろう。

「南じゃ雪は珍しいんだろう？」

いい年をした大人が窓に張り付くのがおかしいのか、女性は低く笑った。

「ええ。でも東がこんなに降るとは思いませんでした。

エドワードは滅多に積もらないと言ってましたから…」

そこまで言って口を噤む。

彼女は死んだ少年にも武術を教えていた。だからこそ墓参りに来たロイを受け入れてくれた。自分と同じく死を悼んでいるだろう人と悲しみを共有するのは嬉しいことではない。

「サー」マスタング」

そんな反応をどう思ったか。女性は静かな声でロイを称号で呼んだ。

「寝るならベッドに行った方がいいが、お茶に付き合わないかい。外に出たら体が冷えてね」

「それは喜んで」

暖炉にかけた鍋には常に湯が沸いている。

茶器を運んできたイズミがその湯を使って煎れてくれたのはどこか不思議な香りのする薬草茶だった。

「後は自分の好みでね」

示されたトレイにはウイスキーの瓶と、蜂蜜の瓶が並ぶ。

イズミは自分のカップに両方を垂らしてよくかき混ぜた。

「両方とも？」

「あたしはこれが好きだね」

そういつてイズミは美味しそうにお茶を飲むから、ロイも真似て蜂蜜と酒を茶に垂らした。

スプーンでよくかき混ぜてみると案外この組み合わせは良い。半分も飲まぬうちに体が温まってくのがわかった。

しかしそうすると再び感じるのは猛烈な眠気で、思わず今まで寝ていた長椅子に倒れこみそうになる。

「動きたくないならもうそこで寝るといいよ」

さすがにあたしじゃ男のあんたを運べない。イズミは笑っているがロイに眠るように進めた。

「こんなに眠たくてしょうがないのは久しぶりですよ。」

明日の夜まで寝ていそうだ」

長椅子に凭れ掛かると、暖炉の熱気が心地よく届く距離は眠気を誘う最高の環境だった。

「寝てればいいじゃないか」

「…そういうわけにもいきません。」

実をいえば黙って出てたものですから、少しでも早く帰らないと部

下に撃ち殺されてしまう」

「また随分と豪気な部下がいるもんだね」

「ええ。あなたと同じ、とても有能な女性ですがこれがなかなか手厳しくて」

「ホークアイって人だね。確か銃の名人っていう」

「…よくご存知ですね」

「エドから聞いたことがあるんだよ。」

「ご息も他の部下も、大臣や他のお偉方には何を言われても平気なのに、ホークアイって女の人に一睨みされたら声も出せないって」  
「その通りです。多分今頃、私を撃つために猟銃でも手入れしているかもしれません」

「撃たれるというのは冗談にしても、帰宅すれば大変な目にあうことは確実だった。」

「とりあえず目の前にある仕事は片付けてきたが、突発的に家を飛び出して早五日。」

「帰り着くまでには合計十日の留守となり、それだけの期間を守る部下たちは今頃大変な思いをしているだろう。」

「王宮議会に持ち込む議事の準備は大方済んでいるが、それでも出発までにすべきことは沢山あった。」

「サー・マスタング。なぜそうまでしてここに来た？」

「今頃仕事に忙殺されているだろう故郷の人々の顔を思い出していれば、ふいにイズミから問われた。」

「…どういう意味でしょうか」

「領家の重職につくお方が思いつきで遠出するかい？」

「咄嗟に返事はできなかった。」

「気まずい沈黙の中、薪の爆ぜる音が静かに空間を支配する。」

「領主の葬儀でも代理を寄せれば済む。」

「友人といっても領家同士の程度程度の礼節があるのに、それを無視して一人で来たっていうのは不思議だね」

「暖炉に薪を数本足し、イズミは暖炉の火を火かき棒でゆっくりと」

かき回し始めた。

「なにか、エドにそれほどの思い入れがあるのか」

気になってね。

零れた最後の呟きがなにを意味するのか理解できないわけではなかった。

確かに自分の行動は異常だ。

いくら親しいといえど、遠く離れた地に住む者同士。まずは悔やみの伝言を送り、実際に墓参りをするなら事前に訪問の連絡をとりつける。

それ以前に、東の地に滞在できる一定の休暇をとれるように事前の調整が必要だ。そういった手間を一切無視して駆けつけてくるのだから疑問に思われない方がおかしい。

しかし自分に向けられるイズミの視線に含まれる色は疑問だけではなかった。

緊張。それから警戒。

「思い入れがあります」

だからそこから先につむぐ言葉は一種の賭だった。

「ありすぎて、だからどうしても信じられなかったんです。

彼女が…死んだなど」

エルリック家の長男であるエドワードに対して、女性の名詞は不適當だ。しかし真実はどうなのかわからない。

冗談と笑い飛ばすかどうかイズミの反応をうかがえば、彼女の手に握られた火かき棒は動きをとめている。

火に照らされる横顔がゆっくりと傾き、黒い瞳が長椅子に横たわるロイを凝視する。

「…いつから？」

そしてようやく聞こえてきた質問に主語はない。

今更丁寧に問わずともそれで真意は伝わるのだ。だからロイは短く答えた。

「春です」

短い回答でもそれが五月の頭から開かれた春議會のことだと知れる。エドワードとロイが対面できる機会は、年三回の議會以外になかったのだから。

「議会在休みの週末に私の友人の家に招かれたんです。そこで夕食時に彼女は酔ってしまった」

奥方手製の果実酒はおいしくて。子供が酒に漬れた事情を補足するが、自分の耳にもそれは言い訳めいて聞こえた。

「だから彼女は警戒を忘れていて、その時」

思い出すのは夜の薄暗さと子供の体の暖かさだ。

酔いつぶれて寝込んでしまった子供を抱きあげると、いつも元気で活発なエドワードのイメージにはそぐわぬ軽い感触に驚かされた。まだ二次性徴の兆しも薄い、少女めいて見える綺麗な子供が自分の体温に惹かれたのか無意識に頬を摺り寄せてくるのに妙な気持ちにとらわれながら寝台に寝かせて、けれどその時までは何一つ疑っていなかったのだ。

エドワード・エルリックは同性の子供で、歳こそ離れているが同じ未来の領主同士、これから長く付き合える良い仲間、友である。しかし現実とは違った。あまりにも予想外のことが多すぎた。

シャツを脱がせた下にあつたのはきつく体を覆う胴衣。

体を締め付けていれば寝苦しかろうと留め具を外せば、素肌には少女のわずかな膨らみがあつて。

最初は自分を疑った。

目がおかしいのか。それとも酒を飲みすぎたかと。

けれど頭を冷やし、罪悪感を覚えながらも眠る子供の体確かめると、エドワード・エルリックの体は間違いなく女性のそれだったのだ。

「そのことを誰かに？」

イエスでもノーでもなく、その先の現実をイズミは問う。

「誰にも」

だからロイも簡潔に事実を告げた。

「彼女自身にも言いませんでした。」

もし他人に秘密が漏れた場合、彼女だけではなく東全体にとっても問題かもしれないことだろうから」

その判断は間違いなかったはずだ。

「だが、私の方がそれからうまく接することができなくて」

言葉の最後にはいくらか苦い笑いが混じった。

通りすぎた過去を懐かしんで、少しだけ寂しくて。

「おかしいでしょう？」

これまでは純粹に友人として接していたのに、女性と知った途端に接し方が変わってしまった」

「…どういう意味だい」

イズミの声に厳しい色が混じる。

「安心してください。あなたがご心配するようなことは何もありません」

来年には三十になる男だ。

普通なら妻を娶り、子供が二三人いてもおかしくない年齢になって  
もまだ結婚しないロイ。マスタングには好き勝手な噂と憶測がつき  
まとっていた。

女とあれば見境なく、しかもひどい飽き性。

次から次に相手を変えては捨てていく。

えり好みは激しくどんな女性も気に入らない。だからいつまで経つ  
ても結婚しない。

こちらから言わせれば、未来の領主夫人を夢見て近づいてくる女性

へ失礼のないよう断りを入れているだけで、実情を知っている身内  
の間ではそんな噂も笑い話でしかないが、遠い地方ならそれが真実  
として広まっているかもしれない。

フォトグラフブックの社交欄がなにより楽しみという妻からロイ「  
マスタングに関する噂を山と聞かされていた北の文官が、議会に同  
行していた領主の令嬢がロイにたぶらかされぬよう必死に警戒して  
いたという笑えない話もある。

「エドワードには指一本触れていません」

厳密に言えば触れたことはある。

ただそれは友人として接する際に派生する動作の中の一部で、卑猥  
な目的である体に触れたことはない。

いや、触れることもできなかった。

綺麗な子供が女性と知って、急激に希望を覚える自分が嫌で、  
迂闊に触れると歯止めが効かなくなりそうで。

「エドワードにとつては迷惑な話だったと思います」

言葉にすれば次々に思い出す。

初めて出会ったのは王宮の庭の片隅。

堅苦しいお仕着せにも構わず芝生に寝転がっていた子供の、大人に  
見つかった子供特有のばつの悪そうな顔。

仲良くなってから見せるようになった屈託のない笑顔。

そして、事実を暴露した時の絶望的な表情。

同年代の少女に好意を寄せられて困っていたのは思春期特有の照れ  
ではなく、本当に受け入れ様がなかったからなのだ。

今になればすべて繋がる出来事も、その時は全く気づかずにと数年  
もすれば女性の良さがわかる、と笑って話した自分はなんと嫌な  
大人だろう。

「妙に行動を意識して、私以外の誰かと行動するのが許せなくて口  
出しをしました。

それでも春の議会の間はまだどうにか取り繕えた。  
だが、帰ってからはずっと彼女のことばかり考えていたものだから

九月の議会で会つと舞い上がってしまった」

「舞い上がる？」

大人の男が、自分の半分しか年を重ねていない、それも男と偽る少女に対して使う言葉とは思えなかった。

だがそれが真実なのだ。

「呆れるでしょう。」

けれどとにかく始終私がそんな調子だからうまくいなくて、初めて喧嘩をしたんです」

ロイの心配を裏腹に、エドワードは何事もなかったように日々を過ごしていた。

後になれば、自分も大げさだったのかもしれないと思う。

自分も体を見るまですっかり同性だと信じきっていたのだから、急に周囲の態度が変わるわけでもない。

それでも心配で、東の家臣たちがいない時はできる限り一緒に行動するように勤めた。

エドワードはそんなロイの態度の変化に戸惑っていたようだけれど、決定的だったのは議会の最後の週だ。

首都で過ごす最後の週末、親しくなった議員の息子に泊りがけの招待を受けたと聞かされて猛反対した。

もし自分以外の人間が偶然でもエドワードの秘密を知ったら。

そして、彼女に惹かれるようになったら。

考えるだけでも気が狂いそうだったのだ。

「その時について、秘密のことを言ってしまったんです」

告白の後にはひたすら重たい沈黙。

空気の静けさが嫌で、ロイは再びカップを口につけて場を紛らわす。蜂蜜と酒を混ぜた薬草茶は少し温くなっていて、残りを一気に飲み干した。

蜂蜜の甘みで隠れていたが酒の量も随分多く、体に熱がこもっているのが自分でもわかる。

「それからは完全に避けられて、結局まともに会話もできずに議会

が終わってしまいました。

何度か手紙を送ったが返事は来ないし、それなら二月の議会で会った時にきちんと話し合おうと考えていた」

なのに少女は死んでしまった。

たったの十五で。少年と偽ったままで。

王宮に勤める友人が急ぎ知らせてくれた手紙を何度読んでも現実味はなく、けれど気持ちは落ち着かず、気がつけば仕事も放り出して馬に飛び乗っていた。

「墓を見て、現実を認識したらずぐ帰るつもりでいたんです。まさかこうやってあなたやアルフォンスに会えるとは思っていませんでした」

通りすがりの民に道を尋ね、たどり着いたのは領主の墓。

それを見たらすぐ帰るつもりでいたから、この牧場に泊まるのも全く予想外の出来事だった。

こうやって、秘密を誰かに話すのも。

「エドが引き合わせたのかもしれないね」

いくらか沈黙が続けた後、イズミはぼつりと呟いた。

「今日は本当に偶然ばかり続いてるから」

アルフォンスとロイが会うつところから、いくつもの偶然が重なりあった結果なのだという。

先祖の墓地に来た子供が黒い馬と見慣れぬ男の姿を見つけ、家に帰って母親に知らせた。

知らされた母親は嫁入り前に城に勤めていたことがあり、もし領主の客人ならばと心配して城まで子供を知らせにやった。

その時に限ってアルフォンスは雪の様子を見るため城の表門まで出ていたから直接使いの話を聞き、すぐさま墓地へ来ることができたのだ。

もしなにか一つでも事情が違えば確実にロイとは会えなかったらう。「それなら喜ばしい偶然です」

名前しか知らなかった人に直に会い話すことができた。

これは感謝すべきことだ。

「サー」マスタング。あと一つだけ訊いていいか」

「なんなりと」

「もし彼女が生きて二月の議会に出席していたなら、あなたはなにを話し合うつもりだった？」

教えてほしい。

まっすぐに自分を見る黒い瞳の色は険しい。

「…笑わないでくれますか」

「もちろん」

ただ、怒るかもしれないけどね。

真面目に補足するから、それは怖いな、と肩を竦める。

右手に熱いお茶の入ったカップを持って、ゆっくりと飲みながら左手で飛び掛ってくる男を投げ飛ばすという逸話のある女性だ。

馬に乗れる程度にしておいてくださいよ、と軽く冗談を添えて、それからロイは言葉を搜した。

お茶のせいかわどく眠たくなってきて、時折瞼が重たく沈む。

「まずは…事情を知りたかったんです。

アルフォンスのような立派な男子がいるのになぜ彼女があんなことをしていたのか。

そして現状を覆す方法はないのか。もし都合よく事が片付いて彼女が普通に女性として暮らせるのなら、」

言葉を区切り、一度息をする気配。

「私と…私のところに来る気はないか」

「それはつまり、娶りたいと？」

「結果的には。実際そう簡単でないとは思っていましたが」

おそらくエドワードのことは東の領主とごく一部だけの秘密だろう。

その背景にあるものがなんなのかわからないが、簡単にかかわれる問題でないことだけは察せられる。

「エドワード」エルリックは性別を抜きにしても魅力的で、それにとっても気の合う人間でした。

年が離れていても話や考えはよく合って、議会の度に会えるのがとても楽しみだったんです。

他愛ないことを二人で話すだけでもとても楽しかった」

どうせ今だけだ。寝ぼけついでの戯言だ。

そう思うといくらか罪悪感は軽くなった。

「今になって思えば多分私は最初から彼女のことが好きだったんです。確実に惹かれていた。

だが、まさか同性に対してそんな感情を抱くはずはないと片付けていた気持ちだが、エドワードが女性だと知った途端に溢れだした」

「……まるで愛の告白だね」

「ええ。もし二月の議会でエドワードに会えば実際面と向かって言っただと思います。

もしかしたら昔のように攫って連れ帰ったかもしれない」

旧王家の時代まではそんなこともできた。

気に入った娘を強引に攫い、自分の家に閉じ込めておいてから娘の家に結婚の承諾を求めるといってもない悪習だ。

今の王政になってからはそれも悪しき過去の遺産として廃止されたが。

「あれは私がよく仕込んでるからね。そう簡単に攫われてはあくれ

ないよ」

「確かに」

細い外見に反してエドワードは逞しかった。

剣術はまだ苦手だが、一對一の体術や咄嗟の格闘ならロイも危険を感じるようなことさえあったのだから。

そんな過去を懐かしめば、同時に手合わせでエドワードを投げ飛ばしたことを思い出す。

咄嗟に体を転がした子供に怪我はなかったけれど、まくったシャツの袖からむき出しの腕を砂利で擦っていた。

エドワードの正体を知っていれば決して傷をつけるようなことはしなかったのに、とちくり胸が痛んだ。

「だがもう終わった話です。お互いこれっきりにしましょう」

「そうして貰えればありがたい」

知れたら大変なことだから、という呟きの先は聞かずとも想像できた。

王族と四大領主は世襲制が基本で、生まれた子供の存在は全て王宮に申請を義務付けられている。

その申請を詐称していたなどと知ればただでは済まない。

おそらく、エドワードのことはこの東の領地でもごく一部の人間しか知らない秘密なのだろう。

本来なら裁縫や料理を仕込むべき年頃の娘に男の服を着せ、格闘を教えるのは一体どんな気持ちだったろうか。

「だがサー」マスタング。理由を知りたくはないのかい？」

「…興味はあります」

まさか教えてくれるのだろうか。

「だが、私が聞いていいことではないでしょう」

返答は一種の賭け。

「問題はあれが生まれる前からあった」

そしてロイは賭けに勝った。

お茶のおかわりをいれるのか、イズミは再び暖炉にかけた鍋から湯

を掬いポットに注ぐ。

「御母堂：私たちはそう呼んでいたが、五年前にお亡くなりになったホーエンハイム殿の母上のことだ。

この方には多少不思議な力があつてね」

「力？」

「ご母堂の血筋には時々そういう、先のことを読んだり夢で知ったりする力があつたらしい。

私もエドワードのことがあるまで知らなかったが、領家の大事を救ったことが何度もあるそうだ。

例えば：もう二十年以上前だが大渴水があつたらう」

「ええ。東の救済は忘れません」

ロイはまだ子供だった頃の話だ。

植物が成長する春から夏の間に全く雨が降らず、水が不足し、国全体が干上がって農作物は大打撃を受けた。

しかしその時でも東だけは雨量に恵まれ、この冬は備蓄を食い潰すしかないと怯える他の地方と王家に己の収穫物を分配してくれた。

まだ幼かったロイも、父親が城に運び込まれた東の穀物を指差しながらこれが領家同士の助け合いだ、と言い聞かせてくれたのを覚えている。

「その時に東だけが比較的良かったのはご母堂のお陰なんだ。

夢のお告げで教えられた場所に贈り物を供えてお祈りをして、そうしたら雨が降り出したらしい」

どうにも現実味はないが、少なくとも『東の救済』と名称がつくほどにあの年は東だけが良かったのは事実だ。

「私が聞いたのはそれだけだが、他にもそうやって領家を支えてきた事実はいくつもあるそうだよ。

だからホーエンハイム殿も先代も、政への直接的な口出しは禁じたが夢のお告げは大事にした」

「エドワードも、それで？」

「そう。御母堂は奥方の懐妊わかるよりも前に妙な夢を見たそうだ。

最初に生まれてくるのは娘だが、その娘は必ず男として育てなくてはいけない。でなければ家は絶える。

そういうお告げだったらしい。

けれど御母堂はそれを誰にも喋らなかった。

もしかしたら生まれてくる子供が息子になるかもしれないという希望があつたかもしれないし、政にかかわることだからホーエンハイム殿が反対することも考えたのだろう。

だから全てを一人で実行した。

間の悪いことに奥方は領主が議会に出た直後に産気づいて産後の肥立ちもよくなかった。

自分の侍女と一緒に出産を取り仕切った御母堂はその間エドの面倒を付きつ切りで見て、誰一人として赤ん坊の性別が偽られてるなんて知らなかったんだよ。何ヶ月もの間」

気づいたのは体調が回復した母親が自ら赤ん坊の世話をしていた時。

しかし時はすでに遅く、領民の間で総領息子の誕生が祝われ、王宮にも届出は受理された後だった。

実は息子ではなく娘。夢のお告げを信じた祖母が一人で実行したことでだとしても東の領家の面目が潰れるだけだ。

だから偽り続けるしかなかった。

幼い子供を息子と呼び、ぎりぎりの歳まで騙し、やがて性別というものを知った子供が自分の生活に疑問を抱くようになると頼むから我慢してくれと懇願して。

「今でこそあやって元気だがアルフォンスは生まれつき体が弱い子だったし、御母堂がお亡くなりになってエドを女の暮らしに戻そうとした途端に領主も病になる。

だからエドは、自分は男でいるしかないと決心したんだ。

決心して、ホーエンハイム殿の代理で議会に出席して」

「そこで私と知り合った」

「そう。これが東の領家の秘密だ。

終わったことではあるが口外はしないでくれよ」

最後にはそう念押しされた。

「この東でも秘密にしていることなんだから」

「…少しもそんな風には見えませんでした」

そんな重たいものを背負っている悲壮感などあの子供から感じたことはなかった。

記憶にあるエドワードは元気で、いつも明るく笑っていて、東の領地と家族を素直に愛していた。

「まあ、元から男勝りな気性ではあったからねあの子は。

城じゃ私の仕込みが良すぎたなんていわれてるらしいが」

武術に乗馬、狩に釣り。

女性らしからぬことばかり徹底的に叩き込んでやったのだとイズミはいう。

「ちつとも女らしさはなかったらう？」

「確かに…でも、綺麗な子でしたよ」

体を見るまでは気づかなかったほど男として自然に振舞っていた子供は、それでも時折はつとするほど美しかった。

「誰よりも綺麗でした」

娘らしく着飾った姿は想像しづらいけれど、簡単に編んだだけの金髪も大きな金の瞳もよく笑う顔も全部綺麗で、好きだった。

もし彼女が何事もなく娘として育っていたらなんの障害もなく出会って恋ができたらうか。

けれど領主の息子としての地位があつたからこそエドワードは首都に來たのだ。深窓の令嬢ならまず出会う機会さえあつたかどうか。どうやって皮肉な運命だ。

思いを伝える間もなく、綺麗な子供は自分の心だけを奪って消えた。

「綺麗で…」

茶の効果だろうか。

さきほどから感じていた眠気は一層強くなり、もう瞼をこじ開けることさえできなかった。

明日からのことを考えればこのまま眠った方がいい。感覚に逆らわずロイは体を横たえた。

朝までの短い眠りの合間に金色の子供の夢を見ることができればいい。

意識が落ちる直前、そんなことを願いながら。

停車場から繋がるホールの混乱は大層なものだった。

入り乱れる人、荷物、声、足音。

新年の六週間後に東西南北の領主が首都に集い開かれる年初めの議会は毎年の行事。各地方から来た馬車が停車場に一齐に集い、荷降ろしで賑わうのも恒例の風景だった。

しかし今停車場にいるのは一団体だけというのにこの空気はどうしたのか。こんなに混乱し、殺気立っているのはロイの記憶にある限り始めてのような気がする。

「まったくひどい目にあつたよ！」

馬車を降りるなり外からよじのぼって、車体の上を包んでいた防水カバーを剥がしにかかる従者が悲鳴混じりの声をあげていた。

「この雪じゃ峠の道も随分苦労したろう」

到着した人数と荷物を確認する城の馬車係が言えば、馬車に飛びついた従者たちは一齐に首を縦に振った。その髪も服も、遠目に見てわかるほど湿っている。

「ゲラン峠ときたら道じゃなくて沼だよ沼！」

泥跳ねがひどいお仕着せの右腕に縫い付けられた腕章は緑。

混乱を避けるべく議会に訪れる一行は領主の旗色と同じ色の腕章をつける規則になっており、緑は北の色だった。

国を北から南まで突き抜ける街道の、首都セントラルへ入る直前にはゲラン峠という大きな難所がある。

崖崩れが置きやすい要所所はコンクリート堰などを配しているが肝心の道全体の舗装はまだいきわたっておらず、今のように一週間近く雨と雪が交互に降り続く悪天候だと従者の言うように道はひどいぬかるみになる。

お仕着せもさることながら、馬車の天井近くまで跳ねた泥を見れば、この従者たちが坂の途中で泥まみれになりながら車体を押す光景は

容易に想像できた。

冬にしては珍しい悪天候は交通事情を悪化させ、ただでさえ各地から半月近い旅をして首都にやってくる領主たち一行の足を鈍らせている。

それは北部だけに限らず、今回は東西南北全ての一行が到着遅延を知らせる早馬を先に遣わせていた。

通常なら領主たちは議会の前々日までに首都入りする。

議会の期間中は城内に宿を与えられるが、そこに落ち着きに解きや挨拶するだけでもそれなりの手間があるからだ。

議会前日の昼までに完全に入場を済ませ、夜は王主催の歓迎の宴に参加し、本格的な議会は翌日からの開始となる。

今日は議会前日の夕方で、本来なら領主たちは王に到着の挨拶を済ませ、夜の宴の身支度をしている頃だ。

しかし天気には狂い、前日入りできたのは比較的地の利が良い南だけ。残る三領地は全ての行程が一日遅れとなった。

しかも三領地のうち、到着したのはまだ北だけだ。

本来なら入城の前の晩は馬車も人もそれ相応の身支度をしてくるのだがこの悪天候では仕方がない。

前代未聞の泥だらけの入場にくわえ、刻一刻と迫る宴までに準備するべきことは山のように残っているから場の空気は逼迫していた。

長旅でくたびれている領主夫妻の身支度のやり直し、それと同時に進行で宴の場に彩りを添える土産の準備。

一組だけでも殺気だっているのだから残る東と西がくれば今以上の混乱になることは目に見えており、それを考慮して配備された警備部隊と小間使いたちは少しでも早く北の一行の荷が片付くように黙々と働いていた。

「その方！」

下手に輪に入れば手伝わされることは必死だから、半端に開けた裏階段との間仕切りドアからホールの様子を見ていたロイだったが、どこかヒステリックな声に視線をやれば、

「それ貸してくださらない？」

丁寧な口調と裏腹に声も態度も随分と勇ましい。

ずかずかと勢いの良い大股でロイめがけてやってきた女が、ロイが手にしていたタオルの束を示した。

びつしよりと濡れた紺色のコート。彼女も北の一行なのか。

地味な装いは侍女に見える。

「…これは使う予定が」

「なんに？」

きつく問い返されたが咄嗟に返答が出てこない。

「北の領主様に貸していただけると助かるの。後で洗ってお返しするわ」

そついう彼女の背後では、ひどくくたびれた様子の領主夫妻が馬車から降りるところだった。まさか老年の領主が従者と一緒に馬車を押したわけではないだろうが、これだけ天気がぐずれば馬車に乗っているだけでも濡れる。

到着するなり目の前に乾いたタオルの束をもっている男がいれば使わない方がおかしいだろう。

「…誰でもいいから文官に返してくれ。ヒューズに頼むといえばそれで話は通る」

「あなたのお名前？」

「いや、友人だ」

正確に言えばだし、彼の姓の後には王城査察部長という立派な肩書きが続くのだが、それをこの場で説明すれば事態はひどくややこしくなる。

まさか停車場でタオルを持って突っ立っている男が南の領主息子などと誰も予測はできないだろうし、そのせいでこの女性が職を失うことなどあつてはならない。悪いのは簡素なシャツとズボンだけでうろついている自分の方なのだから。

「ヒューズさんね。わかりました。お借りします」

ロイが持つタオルの束のおおよそ半分を引き抜いて侍女はあわた

だしく主人の下へと引き返した。

宴の開始まで約三時間。庶民の宴ならともかく、国王主催の集いに参加するには残された時間はあまりにも短すぎる。

王は三領地の遅れを知り、宴の開始を遅らせると告知したが、それでもやはり遅刻は印象が良くない。極力早く支度をしないと、焦る空気がホールに満ちていた。

「東と西、続けて入ります！」

北の領主夫妻と一握りの荷物が先導と一緒に消えると、今度は残り二領地の到着が同時。一気に二十台ほどの馬車が増えると停車場の混乱は一層ひどくなった。

とりあえず宴に必要な最低限の人と荷物を降ろしただけの北の一行が片付かないうちから一斉に駆け込んできたのだ。

今しがた到着した二組は北以上に焦っており、荷車から飛び降りた従者が一刻でも早く荷を降ろそうと荷台にかけた防水布へ手をかける。

しかし停車したその場で荷解きを初められたら混乱するのは必須で、事態を察して手配された城の侍女や小間使いたちが団体別に荷物置き場をわけて荷卸の手配を始めた。

一瞬の差で先に入城したのは西だ。黄色の腕章。

ロイが心待ちにしていた赤い腕章の一団は最後で、人ごみを縫って近寄るとちょうど、泥だらけの馬車から小柄な姿が降りてくるところだった。

「アルフォンス！」

騒々しい停車場だったが声は届いたのか、金色の髪が揺れてこちらを向いた。

近寄ってみれば金色の瞳が驚きで大きく見開かれたけれど、それよりも周囲の反応の方が早い。

「これは南の……」

家臣の一人が声をあげ、それに忙しく立ち働いていた従者たちが一斉に動きをとめた。

「私は気にしないで続けてくれ」

一斉に集中する視線はいたたまれない。手で示せば、従者たちは現状を思い出して再びせわしなく動き出す。

「サー」マスタング。お久しぶりです」

「本当に」

次は首都で、といって少年と別れたのはたった半月前だ。

突然墓参りに押しかけてきた自分を彼と彼の家族は嫌がることなく出迎えてもてなしてくれた。

けれどそれは非公式で、南の領主の息子としての行動ではないから知っているのはごく一部だけだ。

「余計かもしれないが様子を見に来たんだが…馬車から放り出されでもしたのか？」

東の新しい跡継ぎ息子の姿は悲惨なものだった。

ズボンには泥染み。泥だらけの革靴は素足に履いている様だ。金髪にもところどころ泥が絡むし、上着もズボンとミスマッチで、馬車の中で慌てて着替えた様子が伺えた。

従者たちは荷物をおろすのに大急ぎでアルフォンスに気を配れないでいるから、タオルを渡すと素直に喜ばれた。

「ゲラン峠で馬車がぬかるみにはまったんです」

だから馬車を押し出す手伝いをして汚れた、というのは当たり前前の話に聞こえるが、一国の王に近い権力を持つ領主の息子の行動ではない。

「先に進めないかと心配しましたが、アルフォンス様が先立って動いてくれたおかげで我々もどうにかよそと足並みを揃えることができました」

もしエドワードが同じことをすれば苦虫を噛み潰したような顔で叱っていた重臣が、アルフォンスの行動にはどこか誇らしげな表情さえ浮かべてロイに言った。

多分この老人もエドワードの秘密を守っていたのだろう。  
今になれば思い当たる節はあちこちにあった。

しかしその重臣も、肝心の領主がひどい馬車酔いをしているのに氣をとられて二人の会話から外れてしまう。

「お帰りは間に合いましたか？」

従者たちの邪魔にならない場所に身を引き、ほんの束の間近況を尋ねあう。

宴が始まればそれなりに人目はあり、議会の合間も他のことに氣を散らせないから、次にゆっくり話せるのはいつになるかわからない。「どうにか。さすがに帰りは馬も私もくたびれてしまつて帰りに六日かかつてね」

「怒られたんですか？」

「それはもう。」

罰としてたつぷり宿題を貰ったから、しばらく週末休みも机に嚙り付きだよ」

なにも告げず、ただ議会への出発までには戻つてくるとだけ書置きを残していたのだから家族や部下が心配するのは無理もない。

どうにか城に帰りついた時はみんな喜んでくれたが、時間が経つと冷静になったのか、一晚たつぷり寝て仕事に顔を出した時ロイを出迎えたのはあからさまに怒りを浮かべた部下達だった。

父親は、ロイにも何か事情があつたのだろつ、理由は聞かないが二度とこんなことはするな、とだけ言つた。

徹底していたのは部下の方で、長逗留でただでさえ荷物が多いところにこれ見よがしに大量の書類を詰め込んだ木箱を追加してくれた。この書類を全部片付けてくれなければ許せません、という彼女も自分を心配してくれたことはわかるから無駄な抵抗はしないけれど。

「大変ですね…」

「だがそれでも時間はあるからね。

どこか行きたい場所や見たいものがあるなら連れていくよ。

考えておきなさい」

昨年若くしてなくなった兄の代わりに東の領地の跡継ぎとなったこの少年が王宮議会に参加するのは今回が初めてだ。

かつて彼の兄、正確に言えば少年と偽っていた少女にそうしたように教えてやりたいことは沢山ある。

それは自分に対する慰めかもしれない。

けれど自分が焦がれた少女の弟も、そういう思い入れとは別にして素直に仲良くしたいと思う相手だった。

多分彼とは長い友人に慣れそうな気がするのだ。

「まだ首都のことはわかりませんが、一箇所だけは決めてるところがあります」

「ほう？」

彼の姉がそうやって望んだのは王宮図書室だった。

親に似たのか聡明で勉強好きな子供だったから、普通の娘がドレスや宝石を喜ぶ時のように目を輝かせて貴重な文献を読みふけていたものだ。

「行き先は秘密ですけど」

けれど、そこでアルフォンスは不思議なことをいう。

「実をいうと僕も詳しいことは知らないんです。

ただ、ものすごくびっくりするものがあるところに」

「ものすごくびっくりするもの？」

「はい。父がぜひ貴方に一緒に欲しいと言っていました」

その肝心のホーエンハイムは馬車酔いでへたっている。

そのうち気分がよくなったら改めて招待するだろうけれど、とアルフォンスは笑っていった。

「なんだろう。想像がつかないな」

学者としても高名なホーエンハイムだから学術上価値のあるものだろうか。

東の領主とその家族には、死んだ少年が少女であることを知っていたとは言わなかった。

自分が話した牧場の女主人は秘密を口外しないことを約束してくれたから彼女から領主に話すこともないだろう。

すべて終わったことなのだ。

けれど忘れられないこと。

だから、折り合いをつけながら日々を過ごしている。

「では楽しみにしておくよ。さあ、急がなくては」

騒々しい停車場に割り込むラッパの音。

青いビロードのお仕着せを着た男たちは先導役で、各一行をそれぞれ滞る部屋まで案内するのだ。

夜の宴、そして翌日からの議会。

時間はめまぐるしく過ぎ、東の領主親子からウィロビーハウスと呼ばれる館へ招待を受けたのは議会を終え、南に戻る直前の週末だった。

どさり、なにかが落ちる音。

それと同時に暖かい毛布も体から引き剥がされて、ロイは心地よい眠りから一気に目覚めた。

暖炉に火が焚かれた部屋で凍える思いこそしないが、やはり素肌を空気にさらけ出せば体には寒気が走る。

けれどまだ体は睡眠を欲していて、再び貼りつきそうになる瞼を無理やりこじ開ければ、横たえた視界の先にあるのは自分の体から離れていった毛布の一端。

「あいた……」

それから、寝台の足元から聞こえてくる小さな声。

「……………！」

たつぷり三秒は何事だろうと考え、やがてその声が女性の、愛しい少女の声だと気づく。

「エドワード！」

慌てて寝台の淵まで上半身を動かしてのぞけば、ずり落ちた毛布の下に隠れる膨らみかもぞりと動いた。

旧式の寝台は床が高く、マットレスは大人の男が立った時でも腿の位置にある。

そこから床に落ちたのだからさぞ痛かったろう。怪我をしていないと良いが。

寝台に上り下りするために用意されている踏み台を確認する間ももどかしく寝台を飛び降りて毛布を剥がすと、現れたのは金髪の少女の小柄な体。

「大丈夫か？」

「…うん」

「気をつけなさい。降りるならちゃんとステップを確かめて」

「ごめんなさい…」

いつもの活発さとは無く、寝ぼけているのかどこか呆けた様子の少女を抱えて寝台に座らせる。

高さのある寝台から子供のように床に浮く素足を捕まえ、簡素な夜着を膝までまくって怪我がないか簡単に改めた。

「痛いところは」

「足は平気」

「他にどこか？」

腕か。それとも肩か。

高い寝台から落ちた場合打っていそうな場所を調べようと細い足を手で撫で、そこで自分はひどくいやらしいことをしているような気にさせられて見上げると、案の定というべきか。少女の赤らんだ頬と対面することになる。

「…歩けなかったのか？」

眠る直前も彼女は自分で歩くことはできなかった。

主語は省いて必要最低限を問えば、少女は赤く染めた頬を下に揺らす。

「平気だと思ってたんだけど…」

「まだ痛むんだね？」

消え入りそうな語尾を補足してみると少女はますます顔を俯かせた。

金髪の間髪から除く耳まで赤く染まっているのを見るとロイも釣られて昨夜の出来事を思い出すことになり、今更ながら戸惑いがこみ上げてくる。

それはきっと誰もが経験する感情だ。

愛し合う二人でも体を繋ぐ前と後ではなにかが変わる。体を繋ぐことで初めて知る感情もある。

そのなにかが自分でも理解できなくて、けれど体の奥底で、本能で理解している自分もいて、夜の甘さや気恥ずかしさが朝の二人にも戸惑いを与える。

偶然から一つ寝台で眠ることを初めて許された昨日の夜、ロイは

この少女を抱いた。

十六歳の華奢な体を押し開いて繋がった。

いくら恋人として認められているとはいってもまだ婚約式も済ませていない二人に本来この行為は許されない。それに若い恋人はロイにとつてなによりも大切な存在で、正式に結婚式を終えるまで触れるつもりはなかったのだ。

けれど、大事すぎて触れることもできず砂糖菓子のように保護していた少女の体温を間近に感じればもう我慢することはできなかった。初めての行為に怯える彼女になるべく痛みがないよう勤めたつもりだが、いくら丹念に体を解してやっても破瓜の痛みだけはどうしてもない。

痛い、と細い声で泣くのをくちづけであやしなから繋がった少女の中は熱くきつくロイを締め付けた。

どうにか最後まで繋がったものの、やはり大人の男を受け入れるのは華奢な体には負担で、体を清めようとしても少女の下肢はすっかり痺れて自分で動かせなかった。

だから花嫁のように抱きかかえて湯浴みの盥でその体を洗ったことや、時間が経つてもまだなにか挟まつてみたいで、と真面目な顔で告げられたことを思い出すと妙に面映い。

昨夜の記憶はまだ生々しく、おそらく彼女の方も同じようなことを思い返しているのではないか。ロイがちらり見上げると、金色の瞳は慌てて方向を逸らした。

その横顔は綺麗だと素直に思う。

大人の女のように床化粧などしていない少女の素顔。

目は昨夜泣かせたせいか腫れているし髪はところどころ跳ねているけれど、それでもどの女性よりも美しい。

眺めているだけでたまらなく愛しい気持ちがかみ上げて来て、ロイは跪いていた体を浮かせると赤みの差した少女の頬へとくちびるを寄せた。

「もう少し寝てなさい」

男に開かれて間もない体は歩くことにも不自由しているし、なにより初めての甘い時間をまだ終わらせたくはない。

そんな大人のエゴでエドワードの体を寝台に寝かせると、被せてやった毛布の中に自分も一緒に滑り込んだ。そして横たわるエドワードの肩を撫でると、金色の頭がどこか遠慮がちに顔を預けてくるから力で引き寄せる。

てのひらで頬を包み込んで、子供にするように鼻を擦り合わせて、そしてキス。

言葉で指示する代わりに、くちびるの合間へ舌を丹念に差し込めば、昨夜何度も吸ったせいか赤く腫れぼったくもみえるくちびるがゆっくりと開いた。

昨夜は触れ合いの全てに驚き震えていたのに、今朝はどうしたことか。そろり舌を差し込めば、少女のそれが戸惑いながらも絡んで応えてくれるのが嬉しい。

「ん……」

けれどももう止めないと。

鼻にかかった少女の声に我に返ってくちづけを解く。

どうして、と潤む金色の瞳が伺うのに苦笑して、今度は無欲に瞼へキスを落とした。

「言い忘れていたよ。おはよう。気分はいかがかな？」

「うん……」

交情の翌朝の感想など聞かれても困るのだろう。

少女はどこか困ったように眉を寄せ、ロイは？と可愛らしく聞き返してきた。

「私は最高の気分だよ」

だから本音を伝えてやる。

毛布の中で手を動かし、見つけた少女の手を握る。

「大好きな君と一つになれて、これ以上の幸せはない」

その短い言葉が全てを物語っていた。

なにせ、エドワードとこうなるまでの道のりは大変な驚きに満ちて

いて、そのうち空から金貨が降るようになっても自分は平気でいられそうな気がすると思うほどだったのだから。

初めて会った時、この少女は性別を偽っていた。

男で、東の領家の跡継ぎ息子として首都に来て、同性の友人同士としてロイは数年を過ごした。だが少女の秘密をロイが知り、自分の気持ちを確認した直後に領主の息子であるエドワードⅡエルリックは死んだ。

けれど、その死はあくまで『エルリック家の長男』の死であってエドワードの死ではなかったのだ。

南から東まで五日をかけてたどり着いたロイが真っ先に向かった東の領家の墓には、名前こそ新しいものが刻まれていたけれど、土の下に眠る人の姿はなかったのだと知ったのはずっと最近。

ロイが悲しみにくれていた頃、エドワードは新しい名前と家族を与えられて首都で少女としての新しい生活を始めていたのだ。

悲しい運命から性別を偽らねばいけなかった少女を、本来の暮らしに戻してやろうという親しい人たちの働きによって彼女はさる未亡人の孫娘になった。それと同時に、現在では南の領主の息子であるロイⅡマスタングの婚約者。

それが今のエドワードの肩書きの全てで、まさか彼女がほんの二年前まで王宮にいたエドワードⅡエルリックと同一人物だとは気づいていない。

実際、かつて王宮議会で将来有望な男だ、とエドワードを褒めそやした父は、息子の恋人としてエドワードを紹介した時に全く気づいていなかったくらいだ。

まあ、普通は死人が性別を変えて再び目の前に現れるなど考えられないことではある。

東の人々によって密やかに進められた一連の出来事はロイにとっても衝撃的なことばかり、全ての事情を知った時は東の人々を多少恨みたくなるほどだった。

誰だってそうではないか。誘われ訪問した郊外の館で、銀髪の上品

な女主人からこう言われるのだ。

『温室に孫娘がおりますの。』

呼んできてくださると助かるのだけれど」

引き受けて温室に行つて、そこで見つけた背中に声をかければ振り返つた少女はあまりにも故人に似ていて。

しかも、そのよく似ている少女は自分を見た途端に大きな金色の瞳からぼろぼろと涙を零すのだから。

自分を墓まで迎えに来てくれたアルフォンスも、宿を提供してくれた牧場のカーティス夫妻もエドワードに関する秘密を共有するメンバーだった。

ロイが東に來た時はすでにエドワードが首都に移り住んでいたことを知っていたけれど口にはできずにいた、と後で知らされた時に、己の東での行動を思い返せばロイは羞恥で死ぬそうなのほどの氣分を味わされたが。

だが、今度ばかりはこちらが東の人々を驚かせる番だろう。

供もつけずに出かけた遠乗りの帰り、首都にしては珍しい雪のため恋人同士が宿で過ごした一晚。

カンのいい未亡人でなくとも恋人たちの雰囲気を見れば何があつたか察するのは簡単だし、隠すつもりもない。

ロイの素直な言葉が恥ずかしいのか、エドワードは毛布の中に顔を隠してしまうから自分も一緒になって毛布の中に潜りこむ。

薄暗い寝具の中で子供のように顔を突き合わせて、お互いに笑って、くちづける。

少しずつ慣れていけばいい。

キスも触れ合いもその他の全ても。

自分と一緒に大人になっていけばいいのだ。

昨日はおびえていたくちびるが今日は素直に触れ合いに応じるようになって、それが嬉しくてさらに応える。

「俺さ」

そんなくちづけの合間に零れた声。

女性の礼儀作法は一通り身につけたが、やはり生まれてから最近まで男として振舞っていたせいでエドワードはそんな男言葉を使う。

「俺、すごく我侂言ったんだ」

「誰に？」

「両親に。ロイに俺のことばれた後、もう嫌だつて。

男のふりしたくないとか、なんで俺だけこんな思いしなきゃいけないとか、親が傷つくようなことばかり」

口調は乱暴だが少女の心根は優しい。

親を恨んでもおかしくない環境にありながらも親を傷つけたと悔やむのだ。

「だけどさ、そうしたらすぐにここ連れてこられて、死んだことにされて、しかもロイにまた会えただろ。

こんなになんでも思い通りになっていいのかな」

「…思い通り？」

得に深い考えもなくたずね返せば、金色の瞳がどこか困ったようにさ迷った。

それになんとか察してロイは少女の肩を抱き寄せる。

「つまり、君は私とこうなることを以前から望んでいたと？」

声はない。

けれど逃げようがなく枕に顔を埋める態度が肯定していた。

まだ少年だった頃からロイに思いを寄せていたのだと。

「エドワード……」

そんな子供のいじらしさがたまらず、ロイは薄い背中を抱き寄せた。

今でこそ柔らかに存在する乳房を厚い胴着で隠していたあの頃、少女の胸には確実に自分が存在していたのだ。

その頃のすれ違いを思えばもどかしくもあり、懐かしくもある。

「でもねエドワード。」

もし君が普通に領主の娘として育っていたら私たちはこんな風に出会ったり、恋をすることも無かったかもしれない。

君は沢山辛い思いをしただろうが、それも私と君がこうなるための試練だったんだよ」

「そうかな」

「絶対にそうだ」

確信を持っていえばおかしかったのか少女の背中がくつくつと笑いに揺れた。

「さあ、もう少し寝よう」

体が思いどおりにならないエドワード一人で馬に乗せるわけにはいかないし、早駆けも体に応えるだろう。

少しでも早く眠れるようにやんわりと背中を撫でさすった。

自分の馬に抱きかかえて乗って、ゆっくりと帰ったらおそらくウィロビーハウスに到着するのは午後だ。

きちんと客間があてがわれている屋敷に帰ればこうやって肌を重ねる余裕はないだろう。

婚約が春で、結婚が夏。部下たちは準備に忙しいと悲鳴をあげるがロイにはひどく長く感じられる。

雪が止んで春になって世界は一斉に芽吹き、一面青草が広がる夏に  
自分のもとへやってくる花嫁。

もう二度と手放しはしない。

だから早く春がくればいい。

けれど、今の雪だけはもう少し降り続いてもいい。

甘えてくる少女の体温が泣きたいほどに愛しくて、ロイはただただその体を包み込んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9737m/>

---

冬のオペラ（FA/RE/g）

2010年10月8日13時24分発行